

ひたちなか 埋文だより 57



虎塚古墳を掘る 虎塚古墳の最初の発掘調査は1973（昭和48）年8月16日から開始されました。発掘調査の目的は、当時進められていた市史編纂事業の一環として、市域の古墳時代後期の様相を明らかにすることでした。加えて、調査前年の1972（昭和47）年に、奈良県明日香村で高松塚古墳の壁画が発見され、その壁画の保存にいかなる条件を必要とするのかを検討していた東京国立文化財研究所が、虎塚古墳を対象として、未開口石室の温度や湿度、空気組成などのデータを取得することも目的でした。墳丘の測量調査が終了し、埋葬施設の場所を探す作業が始まります。すると、後円部南側のトレンチ調査で横穴式石室の入口付近が見つかりました。（1973年8月）

CONTENTS	資料紹介 ひたちなか市内出土弥生時代の管玉 （田中美零）	
	「私的茨城考古学外史—遺跡・人 出会いと別れ—」 第6回 発掘三昧への道 県内編3（瓦吹 堅）	
	横穴墓を歩く⑳ 大村横穴群 （手柴友美子）	
	ひたちなか市の古墳①改訂版 川子塚古墳と磯崎東古墳群	
	ワンケース・ミュージアム 55 ひたちなか市から出土した石塔	遺跡めぐり 小田城跡と極楽寺跡を歩く
	ワンケース・ミュージアム 56 川子塚古墳の秘密	のぞき見、展示室④ 半袂型勾玉
	歴史の小窓㉔ 刺網のおもり	虎塚古墳花便り㉔ キバナアカギリ ほか

ひたちなか市内出土弥生時代の管玉くだたま

田中美零



柳沢十二所（柳沢）遺跡第3号土器棺出土管玉

東日本の弥生時代中期頃に築かれた墓には、土坑墓・土器棺墓・再葬墓などがあり、それらの遺構を調査すると管玉が出土することがあります。ひたちなか市も例外ではなく、管玉が出土する遺跡がありますが、あまり知られていません。今回の報告では、市内から出土する管玉を集成し、その性格について触れてみたいと思います。

はじめに

筆者が弥生時代の管玉に興味を持ったのは、二〇一九年に実施された茨城県常陸大宮市の宿尻遺跡しゆくじりいせきの発掘調査に参加したことがきっかけである。その調査では、土坑内に口縁部を中心に向けて略馬蹄状りやくばていじょうに並んだ15点の土器が確認され、その中央に破碎された状態の管玉が18点出土している。筆者は、この報告書に茨城県内と栃木県佐野市出流原遺跡いずるはらいせきで確認されている破碎管玉についてまとめていく（田中二〇二二）。

今回の報告は、破碎される管玉の性格や分布圏について検討していくため、市内および周辺の遺跡から出土した管玉を集成し破碎行為や時期について検討するものである。

1 管玉が出土する遺跡の概要

① **差渋遺跡**さしぶいせき 遺跡は部田野字差渋地内に所在し、那珂川の支流である本郷川左岸の標高約二六mの台地北端に位置する。一九九三年十月から一九九四年三月にかけて茨城県教育財団によって発掘調査され、住居跡3基・土坑墓群・土器棺墓2基・土坑38基などが確認されている（櫻村一九九五）。土坑墓は、土坑墓の可能性のある土坑1基を含めると、33基確認されており、その中で管玉は第42号土坑墓から一点出土している。その他、第88号土坑墓からは、勾玉が二

点、土器棺墓と推定されている第117号土坑の土器底面からは貝輪未製品が二点出土している。

② **柳沢十二所遺跡**やなぎさわじゅうにしよいせき 遺跡は柳が丘に所在し、那珂川の支流である中丸川右岸の舌状台地先端に位置する。この遺跡はかつて柳沢遺跡と呼ばれ、一九七一年に旧那珂湊市教育委員会により発掘調査が実施されている（井上ほか一九七二）。遺構は縄文時代晩期の住居跡1基と貝塚、弥生時代土器棺墓4基、前方後円墳（寺



図1 ひたちなか市内の弥生時代管玉出土遺跡



図2 ひたちなか市および周辺遺跡から出土・採集した管玉

前古墳)などが確認されている。管玉は、第3号土器棺墓の土器内から出土している。この土器棺は上半分を欠損する土器の内部に、底部を同一方向にして、別個体の土器が出土している。管玉は内部の土器を取り除いた下から出土したようだ。その他、調査区のトレンチから一点の管玉が採集されている。この二点の管玉については、残念ながら現在所在が不明である。

また、柳沢十二所遺跡には多くの縄文時代後・晩期の遺物が確認されている。大田房貝塚が重なって所在している。一九七一年に藤本武氏による発掘調査が実施されており、その報告が藤本弥城氏によって行われている(藤本一九七七)。報告によれば、調査区内での表採資料に管玉が一点あり、形状や石材から弥生時代のものであると考察されている。

③ 新堤遺跡 遺跡は新堤地内に所在し、中丸川に臨む標高約二五mの台地縁辺部に位置する。

一九五〇年に藤本武氏が発掘調査を実施し、藤本弥城氏によりまとめられ報告されている(藤本一九八三)。

遺構は土坑墓が確認されており、頸部から上を欠損した土器が出土している。報告には平面図等はないが、出土状況が記されており、直径約五〇cm、深さ約六〇cmの小土坑に逆位の状態で埋設されていたとある。出土状況から土坑墓というよりは、土器棺墓と想定した方が良いのかもしれない。管玉はこの土器の近くから一点出土している。

④ 一本松遺跡 市内の遺跡ではないのだが、センターの寄贈品に大洗町の一本松遺跡で表採されたものがあるので、述べておく。管玉は二点あり、藤本武氏により寄贈された。一本松遺跡は、磯浜町に所在し、涸沼川西側の大洗台地と大貫台地の間、標高約二二mに位置する。

一九九九年に実施された発掘調査では、弥生後期の住居跡が82基と弥生中期土器棺墓1基などが確認されている(井上二〇〇二)。

2 管玉の観察からみる破碎について

ここで、管玉一つ一つの観察結果をまとめ、破碎の痕跡がないかを検討していきたい。図2には、原寸サイズの写真と実測図を掲載した。詳細な計測値については、表1にまとめたので参照してほしい。

差洩遺跡の管玉は、直径七・五mmに対して長さが一二・一mmと短い。他の管玉は、直径が五

表1 管玉の計測および観察表

遺跡	図番号	出土位置	直径 (mm)	孔径 (mm)	長さ (mm)	幅 (mm)	重量 (g)	石材	状態	旧遺跡名
差洪	1	第42号土坑墓	7.5	2.5	12.1	8.0	1.4	珪質頁岩	破損部を研磨	
柳沢十二所	2	第3号土器棺	7.0	1.6	20.0	7.0	—	碧玉	一部欠損	柳沢
〃	3	A地区トレンチ	6.0	1.5	20.0	6.0	—	碧玉	一部欠損	〃
〃	4	第Ⅲ地点表採	9.6	2.5	33.0	10.2	4.6	碧玉	縦方向に一部欠損	柳沢大田房 貝塚
新堤	5	土器棺墓付近	6.7	2.0	23.2	6.9	2.0	珪化緑色 凝灰岩	ほぼ完形	
一本松	6	表採	5.7	2.5	21.8	5.7	1.3	碧玉	完形	
〃	7	表採	5.0	2.7	27.2	5.4	1.2	碧玉	一部欠損	

* 現物がない柳沢十二所2・3は報告書の実測図から数値をだし、石材についても報告書記載のものである。

* 石材は、差洪・柳沢十二所4・一本松については茨城大学名誉教授の田切美智雄氏、新堤は筑波山地域ジオパーク推進協議会教育学術部会員の矢野徳也氏の鑑定によるものである。

mmを超える長さ二〇mmはある。管玉の端面はきれいに研磨されているが一方にはかけた部分が見られる。そして研磨がその部分にまで及んでいる。おそらく、割れてしまったものを再研磨して使用したために、長さが短くなったのではないかと考えられる。破損部分のない完形の管玉である。

柳沢十二所遺跡の所在不明の二点の管玉については、観察ができないが報告書に故意か自然によるものか不明な破損部があるという。実測図には、土器棺墓から出土した管玉には、一方から破損した痕跡、トレンチの表採資料では、両側からの二か所に破損部分がみられる。大田房貝塚調査の管玉は、直径九・六mm、長さ三三・〇mmと市内で出土した管玉では、最も大きい。穿孔は内部に食い違いがみられるため、両側穿孔である。3分の1程度が破損しており、少なくとも三方向から割れている。表採資料のため、故意に破砕したものなのか、後世で畑の耕作中に割れたものなのかは、判断が難しい。新堤遺跡の管玉は、一部欠けた部分が見られるが、ほぼ完形のものである。欠けた部分は摩滅していることから、その後も使用していたと思われる。側面には製作時に角柱から成形しきれなかったと思われる陵がうっすらと残っている。また、この管玉も内部に食い違いがあるため、両側から穿孔されていると考えられる。一本松遺跡の図2-6は、表面に傷があるが、完

形の管玉である。直径が五・七mm、長さ二一・八mmと所蔵資料の中では一番小型である。穿孔に目立った食い違いは見られないが、中心に少し出っ張りが存在する。おそらく両側からの穿孔と考えられる。図2-7の方は、直径が五・〇mm、長さ二七・二mmと6よりは長い、かなり細型の管玉である。端面に欠けた部分があるが、摩滅している。もう一端も斜めに大きく欠けているがこちらも摩滅しているため、破損後も大事に使用されていたことがうかがえる。穿孔は内部をのぞくと、かなり食い違いがみられるため、両側から穿孔したものを考えられる。細型のため、穿孔に苦労したのだろうか。

3 管玉の時期

各遺跡で確認される土器から、管玉の時期について触れておきたい。

差洪遺跡の第42号土坑墓からは、少量ではあるが、弥生土器片が出土している。時期を特定するものとして、器面に渦状に一本の沈線がひかれた土器がある。これは、足洗あしあらいⅠ式の特徴であり、中期後葉に位置づけられている。

柳沢十二所遺跡の管玉が出土している土器棺は、上面にあった土器に、無節の斜縄文が施され、下部に埋設されていた土器には、単節斜縄文が施されている(図3左)。また、土器底部は布目痕があり、焼成後に穿孔されている。どち



図3 柳沢十二所遺跡出土の土器棺（左）と新堤遺跡土坑出土の土器（右）

らも特徴的な文様帯が描かれる胴部より上が残存していなかったため、詳しい時期は特定できないが、土器棺の出土状態と底部の穿孔から、足洗式の時期の土器棺であると報告されている。トレンチからは、二本同時施工による平行した沈線文が渦状に描かれた土器が出土しているため、足洗式の弥生中期後葉の時期になることは間違いないだろう。また、かつての柳沢大田房貝塚から表採された管玉も、遺跡が重

なっているため、同時期と考えられる。新堤遺跡の管玉が近くから出土した土坑に埋設されていた土器は、底部から胴部が残存しており、胴部の4分の3ほどは、無段の反撚り縄文と思われる原体で施工されている（図3右）。また、上位には、工字文（こうじもん）が描かれており、その中を偽縄文（ぎじょうもん）で充填（じゅうてん）している。土器が出土する遺跡として、同報告書の中で（へたのむしなさんいせき）部田野貉Ⅲ遺跡がある。破片資料ではあるが、

八点出土しており、沈線が施されているものが一点見受けられる。この遺跡は、弥生中期中葉の貉式の指標となる遺跡であり、偽縄文も特徴の一つとなっていることから、新堤遺跡の土器棺と管玉も同時期のものになると考えられる。

一本松遺跡については、報告書に土器棺墓が確認されたとの記載はあるが、整理されておらず、実測図当は掲載されていない。遺跡全体に、弥生時代後期の住居跡が広がり、十

（おうだい）王台式の土器が主に出土しているが、一部に足洗式の土器が出土している。管玉が表採資料のため、時期の断定は難しいが、弥生時代中期後葉から後期に属するのではないかと推測される。以上のことから、市内で出土している管玉については、出土位置が明確でないものもあるが、出土資料から弥生中期中葉から後葉に属するものと考えられる。

おわりに

市内から出土する管玉を集成し観察した結果、目的としていた破砕行為については、表採資料が多く、明確にすることはできなかった。全国的に、管玉の破砕が行われるのは、弥生時代中期中葉からであり、市内の管玉の時期とは合致する。また、管玉は土坑墓や土器棺墓の墓から出土するもの、墓の遺構が検出される遺跡から出土しており、副葬品として収められたものと捉えることに間違いはないと考えられる。そうすると、柳沢十二所遺跡から出土した管玉は、破損部分があるため、墓へ埋葬した時の何らかの儀式で、破砕されたと考えたいところであるが、可能性のある資料として今回は捉えておきたい。

那珂川下流の地域では、弥生時代の墓制について検討できる出土資料が、まだ少ない。今後行われる調査に期待したい。

番外編

最近当センターに、管玉が寄託されたのでここで紹介しておきたい。この管玉は、水戸市上国井町の軍民坂ぐんみんさかという坂の周辺でかつて表採したものとのことだ(図4)。この周辺は軍民坂遺跡として登録されており、主に縄文時代中期から後期にかけての遺物が市の調査により出土している。

管玉の計測値は、直径一七・五mm、孔径三・〇mm、長さ五三・六mm、幅一七・九mm、重さは二〇・二gでかなり大型のものになる。石材は淡青緑色の碧玉で、一部変成しきれなかった部分が茶褐色になっている。穿孔内部には、孔の食い違いがみられ、両側から穿孔されているこ



図4 水戸市の軍民坂周辺で採集された管玉(原寸)

とがわかる。表面はかなり破損しており、縦方向に割れた様子がうかがえる。一方の端面には敲いたような痕跡があり、人為的に破碎したとも考えられるが、表採資料のため、断定はできない。軍民坂遺跡では、縄文時代の遺物が出土すると前述したが、一九八二年に茨城大学考古学研究会が表採した資料について報告しており、その中には弥生時代の土器が含まれている〔川村浩司ほか一九八二〕。縄文時代には、ツノガイや獣骨を使用した管玉や中心が膨らむエンタシス形の石製管玉はあるが、碧玉を使用し、きれいな円柱状の精巧に製作された管玉は確認されていない。おそらくは、表採資料にもあるように弥生時代に伴うものなのかもしれない。

参考文献

井上義安ほか一九七二『柳沢遺跡調査報告』那珂湊市埋蔵文化財調査報告―那珂湊市教育委員会、井上義安二〇〇一『一本松遺跡』茨城県大洗町一本松埋蔵文化財発掘調査会、櫻村宣行一九九五『一般国道6号東水戸道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 差込遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第103集 茨城県教育財団、川村浩司ほか一九八二『さらし』第V号 茨城大学考古学研究会、田中美零二〇二二『2 宿尻遺跡第1号土坑の管玉について』『宿尻遺跡―久慈川・那珂川流域の再発掘―』常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第37集 常陸大宮市教育委員会、藤本弥城一九七七『那珂川下流の石器時代研究』藤本弥城一九八三『常陸那珂川下流の弥生土器Ⅲ』



勾玉と聞くと、タイトルのイラストにあるような、逆Cの字の形を想像する方が多いのではないだろうか。

今回紹介するのは、半杖型はんじょうがたま勾玉です。センターには、差込遺跡さしこいせきから出土した2点と山崎遺跡やまざきいせきで出土した1点、藤本武氏から寄贈された大洗町の一本松遺跡いっぽんまついせきで表採された6点を展示しています。この形の勾玉は、弥生時代中期中葉から北陸地方で多く生産されます。荒く割って楕円形のように整えたあと、くびれ部分の挟りえぐを入れて、その後孔を空けて、最後に研磨するという方法で制作されています。石材には滑石かっせき・翡翠ひすい・碧玉へきぎよくが使用されています。

勾玉は時代によって、形や使われる材料が違います。展示室には、お馴染みの形の勾玉以外にも、土製のものや勾玉の子供が付いたように見える子持勾玉などがあります。ぜひ時代ごとに比べながら観察してみてください。

(田中美零)





熊本県人吉市城本町
おおむら
大村横穴群

手柴 友美子
(人吉市教育委員会)

大村横穴群の所在する人吉市は、熊本県の南東境にある人吉盆地に位置しています。人吉盆地には約九万年前、阿蘇山からの火砕流が堆積し、それが球磨川等によって長い年月をかけて浸食されました。その過程で取り残された、標高一五〇mの独立丘「村山台地」の南縁断崖に大村横穴群は構築され、大正一〇年三月三日、国の史跡第一号に指定されました。

大村横穴群は東西約八〇〇mの崖面に、二群に分かれて現在二六基の横穴が確認でき、横一列に並んでいるのが特徴です。このうち八基には、三角文や円文のほか、武具類といった装飾文様が玄門（入口）部分に確認できます。

中でも七号横穴の文様は、複数の馬が写実的な表現で浮彫されており、鞍を装着したものもあります。また、親子とみられる馬とその他の成馬の間に区画を設けており、これが「牧」を表現して

いるとの見方もあります。

このほか一五b号横穴は大変丁寧な造りで、唯一玄室内にも装飾文を施しています。この文様は円を横一列に配置したもので、熊本県下の初期装飾古墳にみられる、鏡を吊るし並べた様子を表したとされる円文に類似しています。大村横穴群の造営時期は、横穴墓の構造や装飾の様子から六世紀後半以降が中心と考えられています。

大村横穴群の副葬品は早い時期に失われ、現存するものはわずかですが、関連する遺物として知られる「蕨手刀」は注目すべきでしょう。

これは明治四〇年頃に横穴群の前面で行われた鉄道工事中に発見されたもので、原位置は不明ですが、もとは大村横穴群に葬られた被葬者の副葬品であったと考えられています。製作時期が八世紀とも言われますが、全国でも限られた地域に出土する蕨手刀が当地で確認された意義は大きいものがあります。

人吉球磨地域は、鹿児島県や宮崎県と接しており、古くからいわゆる「熊襲」と呼ばれる在り勢力の拠点地域と考えられてき



写真1 大村横穴群東群遠景

ました。しかし当地では少なくとも五〜六世紀頃から多様な古墳が形成され、遺物も大村横穴群の蕨手刀のほか、あさぎり町才園古墳からは稀少な金メッキを施した鏡も出土しています。加えて人吉球磨地域より南において古墳は造られず、当地域がその前線に位置することから、当地が大和王権と直接的或いは間接的に提携し、対南域勢力の拠点的役割を担っていた可能性も考えられます。

大村横穴群をはじめとする人吉球磨の人々は、まさに十五郎穴横穴墓群や、虎塚古墳に埋葬された人々と同様に、当時の日本の国境線を担う重要な役割を果たしていたのかもしれない。



写真2 7号横穴



写真3 7号横穴浮彫文様



写真4 蕨手刀

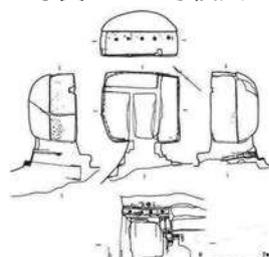


図1 15b号横穴実測図

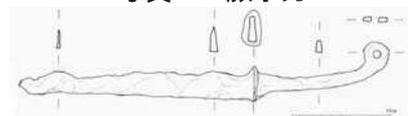
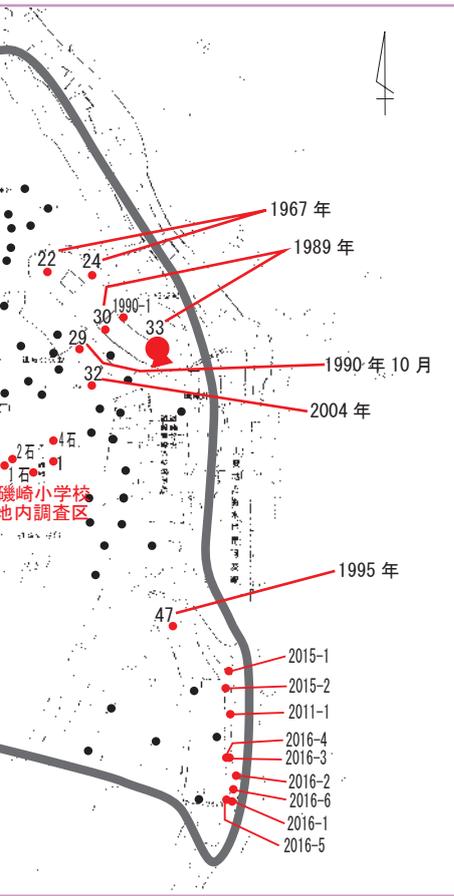


図2 蕨手刀実測図

出典 図1：『熊本県装飾古墳総合調査報告書』より転載／図2：『ひとよし歴史研究』第12号より転載



墳群の分布と調査した墳墓



1989年に調査が行われた第30号墳と第33号墳



調査した石室と出土した勾玉



海を臨む斜面部に分布する石棺墓

見学ガイド

史跡の馬渡輪軸製作遺跡の窯で川子塚古墳に立てるための埴

- * 川子塚古墳は、市の指定史跡として説明板などが整備されており、自由に見学することが可能です。
- * 磯崎東古墳群は、説明板などは設置されていませんが、酒列磯前神社やホテルニュー白亜紀周辺のものを道路から見ることはできます。一部、立入が禁止されている場所もあります。
- * 古墳から出土した遺物の一部は、ひたちなか市埋蔵文化財調査センターの標本陳列室に展示しています。

1 川子塚古墳と磯崎東古墳群

川子塚古墳は、阿字ヶ浦海水浴場の南側の台地上に位置しています。古墳の形は前方後円墳で、規模は全長約 81m、高さ約9mを測ります。この規模は、市内最大となります。発掘調査は実施されていませんが、墳丘にはたくさんの石が敷かれており、人物埴輪や円筒埴輪が見つっています。それらの遺物から、古墳の時期は5世紀後半と推定しています。

磯崎東古墳群は、川子塚古墳の東、酒列磯前神社から旧磯崎小学校の周辺に位置しています。古墳の数は、消滅したのもも多く正確な数は判りませんが、1950年の調査では54基の古墳が確認されています。群を構成する古墳は、直径約20mの円墳が主体で、第33号墳のみが全長40mの帆立貝形古墳です。この古墳は、川子塚古墳と同じく墳丘上に石が敷かれていました。1989年に調査された第30号墳では、3つの石室が並んだ状態で検出され、その中からは、鏡や大刀、鉄鍔、刀子などのたくさんの遺物が出土しました。

2011年から2016年にかけて、海岸を臨む斜面の法面対策工事や震災関連に伴う調査を実施しました。2012年には、旧磯崎小学校の校庭を調査し、直径約15mの円墳と小型の横穴式石室4基を確認しました。円墳の埋葬施設は横穴式石室で、天井石は失われていましたが、入口が閉塞されている状態を確認することができました。石室内からは、人骨や大刀片、メノウ製の勾玉、ガラス小玉などが出土しています。2011年、2015年、2016年には、海を臨む斜面部で墳丘のない石棺墓9基を調査しました。石棺墓は海岸の石を石棺状に並べて造った墓で、床面に石はなく、海砂が薄く敷いてありました。石棺内から遺物は見つかりませんが、人骨が非常にきれいな状況で出土しました。人骨の調査では、男性や女性、幼児、青年、成人、老人などさまざまな被葬者がいることが判っています。

古墳の時期は、出土遺物から5世紀後半から7世紀中頃まで継続していたことが判っており、市内でもっとも長い期間、古墳が造られていた古墳群と考えます。



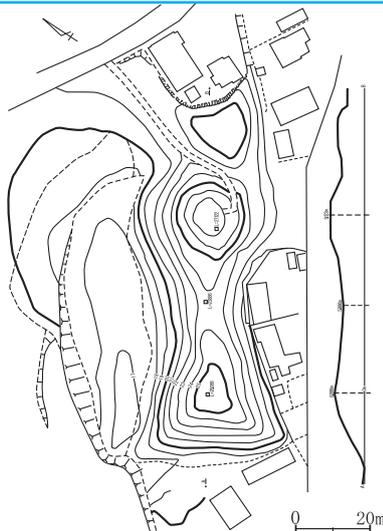
磯崎東古墳



第2号



川子塚古墳の墳丘（手前が前方部）



川子塚古墳平面図



第1号石室



2012年に旧磯崎小学校の校庭



ミニ知識
市内にあります国指定史跡。最初に焼かれた埴輪は、輪と考えられています。

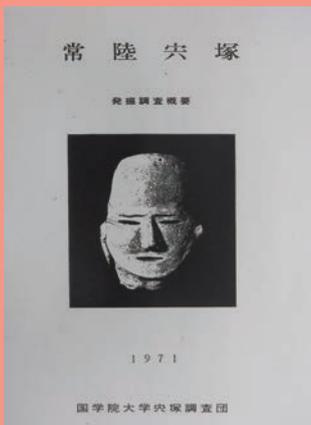
* 古墳の場所や市内の古墳の概要については、『埋文だより』第37号をご覧ください。

一九六八年、杉並区高井戸から大田区上池上へ転居した。滝台遺跡調査の時だったと思う。新居を建てて転居した立止大学教授丸子巨先生から「私の家に住まないか」と誘われたからである。その家は池上線長原駅から徒歩一〇分ほどにある。二階建てで、居住スペース的には、一階が八坪ほどで台所や風呂・トイレがあり、二階は一二畳ほどの畳部屋だった。既に立正大学四年の原田氏が住んでおり、二階は原田氏、一階の洋間は私が主に使用して台所や風呂は共用スペースとした。高井戸からは運送屋を頼んで引越したが、その日付は覚えていない。

その夏の八月三日まで日立市上の台古墳の調査に参加し（『埋文だより』56号掲載）、益は自宅で過ごした。その後、大場研究室が土浦市内で古墳の調査をするので、県内出身者は参加するようにとの声がかかり、八月二日から九月二〇日まで参加した（一次）。発掘は筑波学園都市建設に伴って、土浦と学園都市を結ぶ道路建設予定地内に所在した穴塚古墳群の一部が、地元で土取り業者によって削平されてしまった事が原因で実施され、茨城県教育委員会からの依頼という。この道路が現在の学園東大通りで、七八号墳が削平され、道路予定地北側の五・六号墳、南側の一号墳が調査対象となった。調査団長は大場磐雄先生、現場の指揮は助手相山林継先生、参加学生には大学院生小山修三さん、学部生川井正一・佐藤政則・佐藤正好、鈴木幹男君達と瓦吹、そのほか大学OBの

私的茨城考古学外史—遺跡・人 出会いと別れ—

第6回 発掘三昧への道 県内編3



穴塚古墳の報告書



瓦吹 堅

上川名昭さんも参加した。発掘地は土浦市街地西の穴塚地区にあり、我々は土浦駅からバスに乗って穴塚小学校前で下車して現地に向かった。穴塚小学校近くには、平将門次女の安寿姫の建立と伝えられる般若寺があり、境界石や国指定の建治元（一二七五）年銘銅鐘が著名である。

相山先生達は地主でもある砂田家に泊まることになったが、小山さんはじめ我々学生は地区の集会所が宿舎に充てられた。風呂がなかったので土浦市教育委員会の職員の方々が、集会所脇に野趣に富んだドラム缶風呂を葦藪で囲って作ってくれた。また毎日の食事は醸造業も営んでいた砂田家の大きな土間にテーブルを並べた食卓で食べた。

砂田家は東京農大を卒業された長男元さんが継がれ、男の子が誕生したばかりだったと記憶している。奥さんは元気な方で、小柄で上品なお母さんのほか、元さんの妹さんが同居していた。また、砂田家には数多くの刀剣や水墨画など美術品が收藏されており、刀剣を手入れし、軸も見た記憶がある。

砂田家の西に接する丘陵部に位置する五・六号墳が調査対象。五号墳は南西部が土取りされていたが、直径23m、高さ4mほどの埴輪を持つ円墳であることが判明し、六号墳は円墳と想定されたが、調査の結果前方後円墳であることが判明し、人物埴輪や馬形埴輪片などが出土した。

この調査中の九月八日、大学から大場磐雄先生

が指導のため現地に入られた。この時、茨城県内在住の諸先輩（院友）諸氏が、先生の歓迎と我々調査参加者の慰労を兼ね、土浦駅近くの料亭で歓迎会を開いてくれ、参集された院友は三〇名ほどおられた。大場先生は芸妓さんの三味線で「都々逸」。我々学生達は小山さんのリードで宴会場を「ノーエ節」を唄いながら踊り回ると、諸先輩方から大受け。

調査中何度か土浦の繁華街へ足を運んだが、それは地元教育委員会のTさんの先導だった。駅前のバーやスナックが並ぶ繁華街に、閑取のように大きなママのいた「L」というバーや当時流行った歌「小さなスナック」の歌詞にあるような「白い扉の小さなスナック」へ入ったりして鋭気を養ったが、川井さんは何故かV S O Pしか飲まなかった。

翌年二月二日から三月一二日まで道路南側にあった一号墳の調査が実施されたが、これが二次調査。一号墳は前方部を南西に向けた全長56mほどの前方後円墳で、前方部幅28m、後円部径40mの規模を有していた。調査は主軸に沿ってトレンチを入れ、主体部探索のため東括れ部に調査区を設定して進められたが、主体部は箱式石棺が取り去られた跡が確認された。主軸トレンチ掘りは旧表土まで4m近くあり、掘り上げた土を投げるのはかなり辛かった。旧表土下から弥生後期の土器も出土し、住居跡の痕跡は八軒にも及んだ。出土土器は、当時まだ明確に型式設定されていなかった。

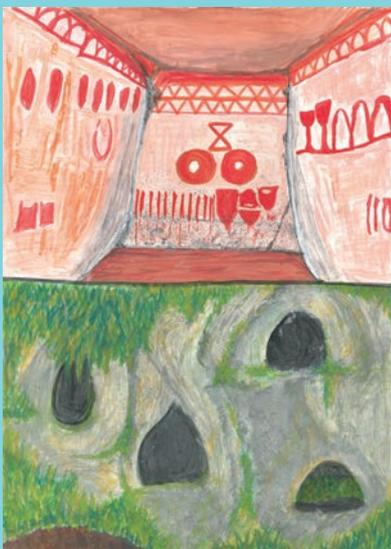
た土器群で、それから約二〇年後、土浦市原田遺跡群から出土して上稲吉式土器と型式設定された。

この二次調査には、一次調査にも参加した小山・佐藤政則・佐藤正好・瓦吹のほか同期の飯塚卓二・今泉泰之・宮崎一郎、一学年下の高林均・斉藤和子かずこが参加した。この調査期間中に大雪が二度ほど降って発掘ができず、その雪の多さに驚いたことを記憶している。発掘が終了して夕食も済むと、桜川沿いにあったボーリング場に出かけたことがあった。この頃、椋山さんは結婚直前で、ときどき砂田家には婚約者の田島さんから電話があった。すべての調査が終了すると、私と今泉君が終了写真の撮影と残務整理、さらに出土遺物を大学まで輸送するため現地に二日ほど残り、最終的にトラックで出土遺物を大学へ搬入した。

二次調査の折も大場先生が現地へ来られるのに合わせ、茨城県社会教育課の大森信英・西宮一男・高根信和たかねのぶかず氏の担当者が現地を訪問。大森・高根先生とは御所内遺跡（埋文だより）55号掲載などでご一緒したが、西宮先生とは初対面だった。この時、西宮先生から八郷町（現石岡市）で三月末に実施される瓦窯跡の調査に誘われた。

大場先生の助手椋山さんを我々は、研究室や発掘では「スギヤマサン」と呼んでいたが、その後馴れもあって「リンケイサン」と親しみを込めて呼ぶようになり、今でもその呼び方は続いている。その後も林継さんとは町田市や和歌山県那智で調査をご一緒した。

2021年度 ひたちなかユネスコ絵画コンテスト 「絵で伝えよう！私の町のたからもの」 受賞作品



長堀小学校5年 高信月心さん

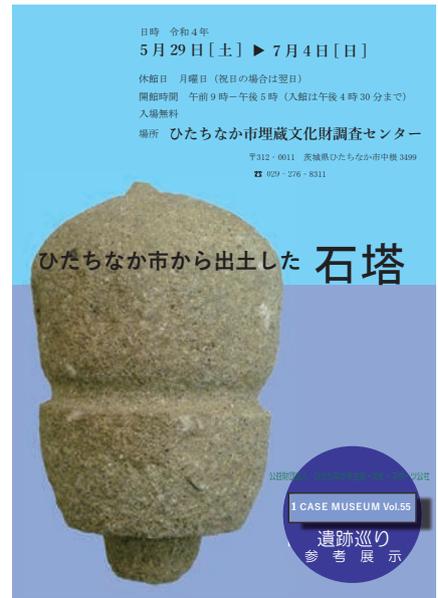


田彦小学校5年 深作奏羽さん

今回のワンケース・ミュージアムは、出土した石塔の造立背景について、近年の研究を参考に考えてみました。また、使用されている石材を調べることで、産地と流通の様相の一端をうかがいました。

沢田遺跡から出土した五輪塔・宝篋印塔は、特徴から中世後期の一五〜一六世紀のものと思われます。沢田遺跡は中世から近世の揚浜式製塩の遺跡として有名ですが、調査区内の「青塚」の周囲からは、多数の骨が出土しており、その付近に中世の墓地があったようです。石塔も「青塚」の周辺から部材が散在して出土しています。製塩作業に関わりのあった有力百姓層の墓に石塔が造立されたのでしょうか。

また、武田遺跡群から出土した中世の五輪塔は、特徴から中世後期の一五〜一六世紀のものと思われます。石塔は中世前期まで武士階級を中心に墓塔や供養塔として立てられました。



中世後期になると有力な百姓層にも拡大します。中世後期には、屋敷地を開発した当主の墓を屋敷地内や隣接地につくりました。家の永続を願う氏神として祀る際に石塔を造立したこともあったようです。屋敷が移転する際には石塔も運び出され、不要となった一部の部材が残されたり捨てられたりしたようです。中世後期の集落跡・墓跡である武田遺跡群から石塔の部材が出土するのは、こうした背景が考えられます。

さて、出土した石塔の石材を調べたところ、砂岩、凝灰岩、花崗岩が認められました。

砂岩製石塔は3点出土しており、いずれも岩質は似ています。ひたちなか市平磯では平磯石と呼ばれる同様な砂岩が産出しますので、平磯の砂岩を切り出していた可能性があります。

凝灰岩製石塔は2点あり、泥質のものと砂質のものがあります。ひたちなか市阿字ヶ浦から東海村村松にかけて所在する凝灰岩層に同様な岩質の部分がみられますので、この凝灰岩を利用していた可能性が考えられます。

花崗岩製石塔は2点出土しています。これらは銀色に輝く白雲母を含む特徴的な石材なので、産地は筑波山塊南東部産(新治地区)と推定できます。花崗岩の小型五輪塔を、遠く筑波山付近から武田遺跡群に運び込んでいたことがわかりました。

※石塔の時期については比毛君男氏、石材鑑定については矢野徳也氏からご教示をいただきました。

(佐々木義則)



展示資料



展示状況

参考文献 … 桃崎祐輔「一九九三元島遺跡出土の中世石塔部材」『元島遺跡Ⅰ(遺物・考察編Ⅰ―中世)』静岡県埋蔵文化財調査研究所

二〇二二年度のひたちなか市埋蔵文化財調査センター遺跡めぐりは、「小田城跡と極楽寺跡を歩く」と題し、初夏の五月につくば市を訪れました。

一〇時半ごろ小田城跡歴史ひろば案内所にバスが到着。小田城跡の発掘成果がよくまとまっているビデオを見て、案内所の方のわかりやすい説明を聞きました。なんとなく知識がついたところで、歩いて長久寺に出発！

小田の集落内の細い路地を通り、たどり着いた長久寺には、鎌倉時代の美しい石灯籠が待っていました。控えめで緊張感のある石灯籠の美しさを堪能していただいた後は、また路地を通って小田城跡本丸へと向かいました。

小田城跡でお昼です。ごはんは小田城跡と旧小田小学校にわかれてとりました。



ごはんの後には、バスに乗って小田駐車場へ向かいます。駐車



場から歩いて三村山極楽寺跡へ、てくてく歩きが続きました。

暑いなか頑張って石造地藏菩薩立像に到着です。お

地藏さまのところからは、鎌倉時代に建てられていた極楽寺の遺跡を一望することができました。三村山石造地藏菩薩立像も鎌倉時代の貴重な文化財です。石籠と呼ばれる石の囲いの中にあるため、お姿がとてもよく残っています。そこからさらに田んぼのなかの道を歩いて極楽寺跡に到着です。そして林の中の大きな五輪塔まで、ゆるい坂を登っていききました。やつとたどり着いた林の中にたまたま美しい五輪塔を拝見し、帰路に着きました。

みなさん、暑いなか、おつかれさまでした。

歴史の小窓 その二八
さしあみ
刺網のおもり



に放り込んでおけば球状土錘が焼きあがります。

写真は那珂川河口近くの遺跡である、ひたちなか市半分山遺跡第五号住居跡（八世紀）から出土した球状土錘です。径二〜三cm、重さ二〇gほどの大きさです。球状土錘とは、魚をとる刺網につけたおもりのこと。古人は那珂川河口や酒沼などの流れがない淀みに、球状土錘をたくさんつけた小さな刺網を仕掛けておいて、魚がかかるのを待つ漁をしていました。仕掛けた網が揺れて、おもり同士がぶつかった際に割れないよう、おもりを玉のような丸い形にしたと考えられます。

ひたちなか市石高遺跡第一四号住居跡（七世紀）の竈の灰の中からは、マイワシの脊椎骨が出土していますので、そのような魚もかかっていたのではないのでしょうか。

（佐々木義則）

丸い粘土玉をつくり、まんまかに割り箸のような木の棒を差し込んで、ぐるっと回転させるとできあがり。それを竈のなか

参考文献 白石真理一九九九「武田石高遺跡古墳時代編」、佐々木義則二〇一六「茨城県における奈良・平安時代漁網錘の分類とその用途」『奈良岐考古』第三八号

川子塚古墳は、阿字ヶ浦海岸南側の台地上に位置する、全長約81m、高さ約9mの前方後円墳です。その大きさは、市内にある古墳の中で、最大となります。『水戸紀年』には、村民が古墳を掘ったときに、石棺を見つけ副葬品には「甲冑・鏃・太刀・短鋒・陶器」などがあつたと記述されています。しかし、川子塚古墳は発掘調査を実施していないため、実態が判っていません。今回の展示では、採集された遺物や、これまで行われてきた個人の研究調査から、川子塚古墳の秘密を探っていく展示を行いました。

川子塚古墳の埴輪

古墳の周辺からは、馬形埴輪・人物埴輪・家形埴輪・円筒埴輪が採集されています。円筒埴輪を観察すると、粘土で筒状に成形したあと、刷毛を使用して器面を縦方向に調整しているのがわかります。その後、刷毛目の上から突帯を付けて、最後にその間を横方向（ヨコハケと呼

ばれる）に刷毛で調整をしています。全国の円筒埴輪の器面のヨコハケ調整はA〜Cで分類されています。川子塚古墳はB種のヨコハケに分類され、連続的に途切れながらも一周ヨコハケがめぐり、波うつのが特徴です。他の特徴として、刷毛目一本一本の間隔が広いことや、内側の調整が部分的にしかされておらず、下部まで処理がされていないなど、全体的に成形の仕方や調整の処理が丁寧ではないことが特徴です。

埴輪の生産地

市内にある馬渡埴輪製作遺跡は、発掘調査が実施されておりA〜Dの地区にわかれ、窯跡19基・工房跡12基・粘土採掘坑20基・住居跡2基が確認されています。埴輪の製作から焼成までの一連の作業場があり、古墳時代に大規模な生産が行われていた遺跡です。

その中の、C地区から出土する円筒埴輪の表面の調整痕を観察すると、縦方向に刷毛で調整した後、突帯部を貼り付けて、突帯と突帯の間を横方向に調整しているのがわかります。また、刷毛目の間隔が広いという特徴も見られます。これらの特徴は、川子塚古墳の埴輪にみられる特徴と一致し、川子塚古墳の埴輪を製作していた窯跡があると推定されています。

地中レーダーでの調査

古墳の実態を探るため、地中レーダー探査機を使用した個人での調査が一九九五年に実施されています。地中レーダーは、地中へ電波を放射し、

埋まっている物体からの反射波をアンテナで受信して表示するもので、遺跡を破壊せず調査をすることが可能です。受信した電波は反射率が高い順に白・赤・黄・緑・青で表現されます。調査は、後円部を重点的に、前方部や周溝付近で計33ヶ所行われました。

後円部墳頂の調査では、一部白で強く反応した場所があり、何か石のような固い物質が埋まっていることがわかりました。実際に墳頂の踏査で1mのピンを地面に刺すと固いものにあたるように、埋葬施設の可能性があります。また川子塚古墳の北西側の周溝と考えられている低地の部分を調査すると、地中にさらに溝があり、古墳を周るように存在することがわかりました。レーダー探査で確認されたこの溝が、本来の周溝である可能性があります。

しかし、レーダー探査は地中の様子を探ることとはできませんが、実際どのようなものに反応しているかまで知ることが難しいです。

今回の展示で、採集遺物やレーダー探査の調査から川子塚古墳の実態を探ることを試みましたが、まだまだ秘密が多そうです。これからの調査やさらなる研究が期待されます。

(田中美零)

川子塚古墳は、阿字ヶ浦海岸南側の台地上に位置する、全長約81m、高さ約9mの前方後円墳です。その大きさは、市内にある古墳の中で、最大となります。『水戸紀年』には、村民が古墳を掘ったときに、石棺を見つけ副葬品には「甲冑・鏃・太刀・短鋒・陶器」などがあつたと記述されています。しかし、川子塚古墳は発掘調査を実施していないため、実態が判っていません。今回の展示では、採集された遺物や、これまで行われてきた個人の研究調査から、川子塚古墳の秘密を探っていく展示を行いました。

川子塚古墳の埴輪

古墳の周辺からは、馬形埴輪・人物埴輪・家形埴輪・円筒埴輪が採集されています。円筒埴輪を観察すると、粘土で筒状に成形したあと、刷毛を使用して器面を縦方向に調整しているのがわかります。その後、刷毛目の上から突帯を付けて、最後にその間を横方向（ヨコハケと呼

ばれる）に刷毛で調整をしています。全国の円筒埴輪の器面のヨコハケ調整はA〜Cで分類されています。川子塚古墳はB種のヨコハケに分類され、連続的に途切れながらも一周ヨコハケがめぐり、波うつのが特徴です。他の特徴として、刷毛目一本一本の間隔が広いことや、内側の調整が部分的にしかされておらず、下部まで処理がされていないなど、全体的に成形の仕方や調整の処理が丁寧ではないことが特徴です。

埴輪の生産地

市内にある馬渡埴輪製作遺跡は、発掘調査が実施されておりA〜Dの地区にわかれ、窯跡19基・工房跡12基・粘土採掘坑20基・住居跡2基が確認されています。埴輪の製作から焼成までの一連の作業場があり、古墳時代に大規模な生産が行われていた遺跡です。

その中の、C地区から出土する円筒埴輪の表面の調整痕を観察すると、縦方向に刷毛で調整した後、突帯部を貼り付けて、突帯と突帯の間を横方向に調整しているのがわかります。また、刷毛目の間隔が広いという特徴も見られます。これらの特徴は、川子塚古墳の埴輪にみられる特徴と一致し、川子塚古墳の埴輪を製作していた窯跡があると推定されています。

地中レーダーでの調査

古墳の実態を探るため、地中レーダー探査機を使用した個人での調査が一九九五年に実施されています。地中レーダーは、地中へ電波を放射し、



展示風景

今回の展示で、採集遺物やレーダー探査の調査から川子塚古墳の実態を探ることを試みましたが、まだまだ秘密が多そうです。これからの調査やさらなる研究が期待されます。

(田中美零)

文埋センターの日々 2022前期

4月

- 3 虎塚古墳一般公開終了 / 12 虎塚古墳石室点検 / 12-13 柴田遺跡試掘調査 / 13 市毛遺跡本調査開始 / 20 横田国男氏資料寄贈【水戸市平塚遺跡出土土器・石斧】

5月

- 8 企画展「海、古墳―海洋民の痕跡を探る―」終了 / 10-19 向坪遺跡試掘調査 / 10 中根小3年生見学



- 11 市生涯学習講座歴史講座1「虎塚古墳と十五郎穴」 / 11・12 市毛遺跡本調査終了 / 12 水戸市立国田義務教育学校中1年生見学 / 17-25 東中根清水遺跡試掘調査 / 19 遺跡めぐり「小田城と三村山極楽寺跡を歩く」実施 / 19-24 磯合

6月

- 古墳群試掘調査 / 20-向野A遺跡本調査開始 / 24-25 小谷金遺跡試掘調査 / 29 ワンケース・ミュージアム55「ひたちなか市から出土した石塔」開始



- 1 神栖市歴史民俗資料館に遺物貸出【三反田堀塚貝塚出土鯨類骨など】
- 4 國學院大學栃木短期大学大工原豊氏に遺物貸出【柴田遺跡出土石鏃ほか】・福島大学考古学専攻生見学 / 7-8 柴田遺跡試掘調査 / 8 市生涯学習講座歴史講座2「海を臨む古墳群ひたちなか海浜古墳群」 / 10 南海国際旅行見学 / 14 向野A遺跡本調査終了 / 17 菅谷西小6年生見学



- 21-23 柴田遺跡試掘調査 / 22 茨城大学博物館学遠隔授業【埋文センターの活動】 / 24 東海村立中丸小6年生見学



- 29 茨城大学博物館学遠隔授業【虎塚古墳について】

7月

- 1 北茨城市歴史民俗資料館へ遺物貸出【三反田下高井遺跡出土土鏃など】 / 2 筑波山ジオパークスタッフ見学 / 3 ワンケース・ミュージアム55「ひたちなか市から出土した石塔」終了 / 5-8 君ヶ台遺跡試掘調査 / 7 安勝司氏資料寄贈【君ヶ台遺跡出土土器・石器】・7 市毛遺跡本調査開始 / 12-20 柴田遺跡試掘調査 / 13 市生涯学習講座歴史講座3「ひたちなか市の古墳のはじまり」 / 13 鉦田市立旭北小6年生見学 / 15 那珂湊第三小出張授業 / 16 ワンケース・ミュージアム56「川子塚古墳の秘密」開始 / 23 3x3x3と考古学

虎塚古墳 花便り

29 キバナアカギリ

今回ご紹介する花は、秋に黄色い花を咲かせる「キバナアカギリ(黄花赤桐)」です。キバナアカギリはシソ科アカギリ属の植物です。本州・四国・九州に生育し、やや湿った林内に生える多年草です。名前の由来は、秋に桐に似た淡い黄色の花が咲くことから言われています。

茎は角ばり、高さは10cmから40cmになります。花は黄色く約3cmの唇形花を茎の先に穂状に付けます。葉は柄があり、三角状のほこ形で、縁に鋸歯が見られます。西日本に分布するものは、花の色が紫色で、形とともに桐を想わせ、秋口に咲くのでアキギリといえます。

「花便り」では、なるべく発行月に近い時期の花を紹介したいのですが、秋はいつも候補探しに苦労しています。今回は久しぶりに秋の花を紹介できました。

(稲田健一)



2010.10.8

①「楽しい考古学1」(講師:さかいひろこ氏) / 24ふるさと考古学

②「楽しい考古学2」(講師:さかいひろこ氏・海老原四郎氏・廣水一真氏) /



27-31 雷土A遺跡・外野開拓古墳群試掘調査 / 31 国営ひたち海浜公園勾玉づくり出張講座

8月

2-6 堀口遺跡試掘調査 / 3 市毛遺跡本調査終了 / 5 千葉県立関宿城博物館資料調査(沢田遺跡出土製塩関連資料) / 7 大洗町主催古墳ツ

アー解説 /



9 インターシップ(東京工芸大学・茨城大学3年生) / 10 市生涯学習歴史講座4「ひたちなか市の生産遺跡 瓦」 / 16-23・16-24 津田

若宮遺跡試掘調査 / 11-18 職場体験(勝田中等教育学校2年生) /



19 上高津貝塚ふるさと歴史の広場資料調査(三反田蛸塚貝塚出土土器片銚など) / 20 ふるさと考古学③

「楽しい考古学3」(講師:さかいひろこ氏) /



23-27 博物館実習(桜美林大4年生) / 24 美浦村文化財センター

より資料返却 / 25 千葉県埋蔵文化財調査センターに資料貸出(遠原貝塚出土土器など) / 30- 市毛遺跡試掘調査開始

9月

4 ふるさと考古学④「虎塚古墳を知ろう」(講師:さかいひろこ氏) / 4 市毛遺跡試掘調査終了 /

「國學院大學栃木短期大学大工原豊氏から遺物返却」 / 11 ワンケー

ス・ミュージアム56「川子塚古墳の秘密」終了 / 13 稲田均氏資料

寄託(水戸市軍民坂遺跡・菅玉) / 13-16 上馬場遺跡試掘調査 / 14 市生涯学習歴史講座5「ひたちなか市の生産遺跡 埴輪」 / 16 千葉県立関宿城博物館へ遺物貸出(沢田遺跡出土製塩

関連資料) / 21 茨城県自然博物館へ遺物貸出(鷹ノ巣遺跡出土ベンガラ資料

など)・北茨城市歴史民俗資料館から遺物返却 / 25 ふるさと考古学

⑤「虎塚古墳を知ろう2」(講師:三井猛氏・梅田由子氏) / 27 神栖

市歴史民俗資料館から遺物返却 / 28 上高津貝塚ふるさと歴史の広場へ遺物貸出(三反田蛸塚貝塚出土土器など) / 29 かさま環境を考える会見学

入館者状況 (2022.4.1. ~ 2022.9.30)

月	開館日数	個人		団体		計
		(人)	(団体)	(人)	(団体)	
4月	26	1367	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1367
5月	26	369	5 (2)	122 (69)	5 (2)	491
6月	26	214	5 (3)	228 (185)	5 (3)	442
7月	27	233	5 (1)	83 (18)	5 (1)	316
8月	26	458	9 (2)	66 (10)	9 (2)	524
9月	26	214	3 (0)	64 (0)	3 (0)	278
合計	157	2855	27 (8)	563 (282)	27 (8)	3418

()内は学校数

ひたちなか市埋蔵文化財調査センター及び(公財)ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社が開催する事業は『市報ひたちなか』及び下記のホームページでお知らせします。
<https://hitachinaka-maibun.jp>

編集後記 虎の子

二〇二二年七月二一日、虎塚古墳の発掘調査を担当された明治大学名誉教授の大塚初重先生が逝去された。大塚先生は、私が小学生の時に初めて覚えた考古学の先生で、憧れの先生でもあった。大塚先生が憧れの先生と記したが、その思いがどれほどのものだったかを示すエピソードがある。それは一九八〇年秋に開始された虎塚古墳壁画公開の翌年、一九八一年四月一日に市役所で開催された大塚先生による公開記念講演会である。その日は小学校で行事があったため、学校を休んで講演会に参加したいと担任だけでなく校長先生にも直談判したが、当然休むことは許されず、大塚先生との初対面は叶わなかったのだ。この時えなかつたことで、先生への憧れがより強くなったと思う。

それから数年後の大学生の時、大塚先生との出会いが突然訪れる。東京から帰省で常磐線の普通電車で勝田駅に向かっているとき、途中駅から乗車し、私の隣に座った人物が大塚先生だったのである。あまりにも偶然な出会いと緊張から、先生にお声をかけることができなかつたが、その日のことは今も覚えている。

憧れの先生から、今後直接ご指導をいただくことはできなくなってしまうが、先生の残してくれた虎塚古墳の研究を続けることで、先生への恩返しができるかと思っている。



イラストはさかいひろこさんからいただいた

ひたちなか埋文だより 第57号

編集 公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社 発行 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター

〒312-0011 茨城県ひたちなか市中根3499 ☎029-276-8311 FAX 029-276-3699

印刷 株式会社 高野高速印刷

ひたちなか市埋蔵文化財調査センターホームページ

